

中高ドイツ語の不定詞前接辞 ge- について

櫻井 健

0. 導入

ゲルマン諸語を分類する基準のひとつに動詞前接辞がある。西ゲルマン諸語には存在し、北ゲルマン諸語には西ゲルマン語からの借用要素以外認められない。これらはゲルマン祖語に近い段階と考えられるゴート語や北ゲルマン語によるルーン碑文では確認できるので、北ゲルマン諸語において独自に消滅したことは確実である。

現代ドイツ語 NHG における語構成の特徴の1つとして、過去分詞が原則 ge- という前接辞を取ることが挙げられよう。この原則は隣接する関連の深い現代オランダ語にも適用されるが、それ以外の現代西ゲルマン諸語ではこうした語構成は見られない。

前接辞 ge- は、より古い段階である中高ドイツ語 MHG では、NHG と同程度に一般化されてはいなかった。古高ドイツ語 OHG、さらにはゴート語ではさらに現代語と同じ基準を見つけるのは困難であり、ここにはなんらかのより強い生産性 productivity を認めなければならない。この生産力は MHG においてもある程度保持されている⁽¹⁾。一方 MHG には前接辞 ge- が動詞定形に前置される例も認められる。

ゴート語には同じような前接辞 ga- が認められる。これについて Streitberg は完了的マーカーであると主張した。また過去分詞の一部に ga- がつかないのはそれら動詞の意味が完了的 perfective であるからだとも述べる。

OHG、MHG ともに ge- が動詞不定形に前接されることがある。ゴート語にも同様な現象があり、これについても Streitberg は言及している⁽²⁾。伝統的には OHG あるいは MHG における ge- + 不定詞は、多くの場合これがない不定詞との同義語として処理されることが多い。しかし例を検証していくと、この ge- はいわゆる非分離動詞の前接辞とは異なり、特定の環境下で不定詞に前置されるものだということがわかる。過去分詞の ge-、不定詞の ge-、動詞定形に付く ge- は程度の差こそあれ生産的だという共通性を示すのである。ただ、これらの ge- について統一的に具体性のある機能を想定

するのは困難である⁽³⁾。本論文は、MHG における不定詞前接辞 ge-が出現する環境の分析と、その特性を探ることとを目的とする。

1.1. 不定詞の出現環境

MHG において ge-を伴った不定詞(以下 INF)は、動詞定形(以下 AUX)とともに複合的に用いられる場合が多い⁽⁴⁾。本論でコーパスとして用いた Nibelunge Not (以下 NL)の一部では⁽⁵⁾、動詞定形 2,134 例中AUX-INF 不定詞は 494 例(23.15%)を占めた。これを narrative ‘nonQ’ と conversation ‘Q’ で分類すると、前者 226 例、後者 268 例であった。コーパス全体の出現する動詞定形のタイプ、各形式別の出現数およびAUX-INF との比を以下表 1 に示す：AUX-INF の出現率は、‘Q’ で 33.5%であるのに対し、‘nonQ’ では 16.8%と低い。

表 1

		出現数(a)	AUX-INF (b)	b/a	
‘nonQ’：	直接法現在形	pr-ind	34	10	29.4%
	接続法現在形	pr-opt	2	1	50.0%
	命令法	pr-imp	1	1	100.0%
	直接法過去形	pt-ind	1,192	180	15.1%
	接続法過去形	pt-opt	105	34	32.4%
	合計		1,344	226	16.8%
	‘Q’：	直接法現在形	pr-ind	507	187
接続法現在形		pr-opt	51	13	25.5%
命令法		pr-imp	36	14	41.1%
直接法過去形		pt-ind	113	20	17.7%
接続法過去形		pt-opt	93	34	36.6%
合計			800	268	33.5%

1.2. ge-INF の出現率

AUX-INF のうち INF に生産的な ge-が認められる (以下 AUX-geINF) のは、‘nonQ’ で 13 例、‘Q’ で 17 例、合計 30 例である。コーパスの総語数は推計で 14,100 語前後であり、このうち ‘Q’ の占める割合は(行数換算で)34.5%、つまりこの ge-は相対的には ‘Q’ でよりよく出現している。AUX-geINF の出現率は 30(回)/14,100(語)=0.21%である。‘Q’ は概

算 $14,100 \times 34.5\% = 4,865$ 語からなる。‘Q’での geINF の出現は 17 例で出現率は $17/4,865 = 0.35\%$ 。一方 ‘nonQ’ は $14,100 \times 65.5\% = 9,236$ 語で、geINF の出現率は $13/9,236 = 0.14\%$ 。AUX-INF は ‘Q’での出現数が全体の 54.25%、AUX-geINF の ‘Q’での出現率もこれとほぼ同じ (56.67%) で、AUX-INF における geINF の出現はほぼ一定の割合で起こると考えられる。AUX-geINF が ‘Q’でより多いのは、AUX-INF がこの環境でより多く出現しているためと推測できる。

1.3. geINF と共起する AUX

コーパスに出現した AUX とその回数、ge-INF とその他の前接辞の付く INF の出現回数は表 2 に示すとおり。語彙的な ge- と生産的・選択的な ge- (以下 (ge-) と表記する) を 1 つの範疇とすると ge- は前接辞としてもっとも頻繁に用いられる。(ge-) のみでも ver- と並んで頻度が高い。前接辞付き INF は、数回だけのものを除外すれば、kunnan においてもっとも高い出現率を示す。

母数が 2 桁以上の AUX 中 (ge-) の出現率は kunnen で 36.7% ともっとも高い。mügen (8.2%), lâzzen (7.7%) などがこれに続く。AUX としての出現数の多い suln (1.6%), wellen (3.3%) などとは (ge-) はあまり現れない。kunnan と他の AUX との出現率の差はきわめて大きく、(ge-) INF は AUX が kunnen である場合が典型的な出現環境である。AUX としての出現率上位 1, 2 位の kunnen と mügen は、それぞれ 30, 49 例と後者のほうが多いが、(ge-) は kunnen が 11 例に対して mügen が 4 例と、kunnan と (ge-) との結びつきが強い⁽⁶⁾。

また、(ge-) が前置されている動詞を見てみると、もっとも多いのが sîn の 4 例 (wesen を加えれば 5 例) であり、次いで gân の 3 例、ligen, sagen, (an) sigen, stân などが 2 例である。全体的にいわゆる自動詞が多く含まれている。

表 2

AUX	出現数	ge-	be-	ent-	er-	under-	ver-	wider-	計	前接辞 の率
beginnen	27								0	0
biten	12								0	0
denken	1	1							1	100.0
durfen	2	2							2	100.0
freischen	1						1		1	0
heizen	27							2	2	7.4
helfen	1								0	0
hoeren	14	1							1	7.1
kiesen	1								0	0
kunnen	30	11(1)	1	1	2		4		20	66.7
lâzen	26	2(3)	5		1				11	42.3
loben	1								0	0
mügen	49	4(3)	1		7		8		23	46.9
müezzen	38	0(3)	1	2	4		4		14	36.8
ruochen	1								0	0
sehen	29	1							1	3.4
suln	124	2(6)	6	3		2	6		25	20.2
trouwen	3	2			1				2	66.7
turren	5	1	1						2	40.0
vinden	5								0	0
wænen	5						1		1	20.0
wellen	91	3(3)	6		2		5	1	20	22.0
werden	1		1						1	100.0
TOTAL	494	30(19)	24	6	17	2	29	1	128	25.9

2.1. (ge-) の出現する節の特徴

次に (ge-) が出現する環境のより大きな単位である節のレベルで検討する。30 例中 22 例がなんらかの否定辞を含んだ節 (以下 NEG) で、また 30 例中 17 例が 'Q' である。さらに NEG かつ 'Q' が 11 例ある。AUX が können および mügen の場合、(ge-) INF が 'nonQ' かつ非 NEG (non-NEG) である例はない。NEG の全 56 例中、22 例 (39.3%) は (ge-)、さらに 19 例 (33.9%) はその他の前接辞を伴っている (合計 73.2%)。残りは AUX と裸の INF の組み合わせである。表 3 に示すように NEG は、'Q' で 31 例、'nonQ' が 25 例であるが、(ge-) および前接辞付き INF の出現率は 'nonQ' でより高い。

表 3

	'nonQ'	'Q'
TOTAL : 494	226	268
NEG : 56	25	31
NEG+(ge-)INF : 22	11 11/25=40.0%	11 11/31=35.5%
NEG+prefixed INF : 41	21 21/25=84.0%	20 20/31=64.5%

NEG と 'Q' という指標では後者がより上位の環境を形成している。'nonQ'+NEG において (ge-) さらに前接辞がより高い頻度なのは、NEG が表現される動機とこの INF の選択に関する現象が、'nonQ' という環境においてより密に結びついているためだろう。

2.2. NEG と modality

NEG が表現される動機と表現者の観点と結びついた AUX の選択との関連性は高い。とくに modal と NEG が結びつく場合、modal が果たす機能が文脈にのみ依存する場合がある⁽⁷⁾。このような場合でも、より大きなコーパスの観察を通して統語的傾向という形で機能差を間接的に認めることが可能である。否定は一般に、ある節で論理的関係より外側で発話に参与する場合には epistemic modality と、また論理的関係を構成する要素に NEG を内含する場合には deontic modality と同じ機能的地位を与えることができる⁽⁸⁾。

2.3. 否定辞の位置

少なくともこのコーパスの MHG では、NEG と AUX(ここでは modal) との結びつきにあたって否定辞を AUX に前置するかしないかという形式的な差が部分的に認められる。AUX に前置されるか、AUX の直前の単音節語に付く否定辞 en-あるいは-en/-n と niht およびそれ以外の否定語の分布を表 4 に示す。

表 4

AUX	TOTAL	動詞に先行する 否定辞(en-, -ne)*			N + niht	独立した否定辞		
		TOTAL	en-AUX	pron-ne etc		niht TOTAL	niht のみ	others
kunnen	18	12	6	6	8	13	5	1
wellen	13	3	1	2	1	9	8	2
mügen	9	4	0	4	4	8	4	1
suln	8	6	0	6	3	5	2	2
durfen	2	2	1	1	0	0	0	0
lâzzen	2	0	0	0	0	0	1	1
turren	2	0	0	0	0	0	0	2
hoeren	1	0	0	0	0	0	0	1
trouwen	1	1	0	1	0	0	0	1

(* 動詞に先行する否定辞のタイプは刊本によって差が認められるので一括して扱う。)

AUX に先行する否定辞が単独で用いられる例は認められない。AUX に前置される否定辞が、kunnen と共起する場合は多いのは明らかである。前置否定辞は kunnen, wellen, mügen, suln など頻度の高い AUX に集中している(durfen は例外)。AUX と否定辞との形態的な結びつきは次のように分類できる：

(A) 否定辞との結合が強いもの：kunnen, wellen, mügen, suln, (durfen)

(B) 否定辞との結合が弱いもの：lâzzen, turren, hoeren, trouwen

このような分類が、NEG という基準においてとくに顕著であった AUX と前接辞との関係(56 例中 41 例が前接辞つき)とどのような対応を示すの

かを、表2に示したAUXと前接辞との関係を踏まえて検討してみる。

母数が20以上あるものではkunnanが前接辞付きINFと結びつく率が際立って高く(66.7%), mügen(46.9%), lazzen(42.3%)がこれに続く。wellen(22.0%), suln(20.2%)はそれよりもさらに率が下がる。kunnan, mügenでは前置の否定辞の出現率(それぞれ(12/18=66.7%), (4/9=44.4%))と前接辞付きINFの出現率とが近い数字を示す。これらのAUXが用いられる場合、NEGと前接辞付きINFの選択とに次のような関連性が示唆できる: これらのNEGは、AUXとともにpropositionよりも外側に置かれている。否定辞の形態的分布とAUXの語彙的分布の観察が示すのは、kunnan, mügenは外的なNEGと同じ統語論上のレベルで表現者(あるいは表現者が設定する話者)が選択する可能性の高さであろう。

一方他のAUXよりも低い率ではあるが、kunnan, mügenともにnihtのみが用いられる場合も多い。このことだけがNEGがinternalかexternalかの判断材料を提供するわけではないが、前置がexternalであるならば、deonticと仮定することも可能かもしれない⁽⁹⁾。

2.4. 前置否定辞の機能的価値

前置否定辞と独立否定辞との歴史的な関係に注意を払う必要がある。ドイツ語のNEGのパターンはおよそ以下のような変遷を経ている。

ne+VERB > ne+VERB (specific) > null+VERB

ne+iht > niht

ne+VERB niht > (ne+AUX niht) > VERB nicht

nihtが一般化したのは後期古高ドイツ語期、neが特定の動詞とのみ共起するようになったのが12世紀以降とされている。本来の否定辞neは、初期のMHG文献では(1) modal verbがINFを従えていない場合(従える場合の方がまれ)、(2) wizzen, ruochenの場合、単独の否定辞として出現することがあるという⁽¹⁰⁾。このコーパスではne(あるいはen)はINFを従えたAUXの一部に現れている。歴史的にはneは使用範囲が狭まったことは事実と考えてよく、ここでのneは消滅の前段階にあったと推測されるのだが、はたしてそのような形態素にマーカとして機能を与えうるのかという疑問が生じる。このテキストが書かれた時期にはNEG表現の実質は独立否定辞に移っていたと考えられるが、この場合の古い否定辞の役割はどのように想定できるのだろうか。

変化は急変ではなく漸進的に進行した。そして *ne* は特定の動詞との結合でより後まで用いられていたが、*ne* は動詞の意味ではなくむしろ形態と結びついていた。しかし形態と結びついたそもそもの根拠はその動詞の機能にあり、*ne* は結びつく動詞がある機能を中心として持っていることの反映としてその動詞がその機能を果たさない場合にも用いられ続けた。すでに見たように *kunnen* は典型的に *ne* を前置する動詞である。*ne* はとくに *modality* に関してのマーカとしての機能をもっているようには見えない。たとえば

375-1 do enkunde neiman troesten Sifrides wîp.

“Sifrid の妻を慰められる者はなかった”

ability, objective

[[Sifrid の妻を慰める]][[能力がだれかにある]ない]

8-4 si heten manegen recken, der ich genennen niht enkan.

“名を挙げられないほど多くの勇士を彼らは召しかかえていた”

ability, subjective

[[名前を挙げる]][[能力が私にある]ない]

283-2 jane kan in niht gehelfen diu grôze sterke sîn.

“彼の強さをもってしても彼を支えられないでしょう”

root possibility

[[強さが彼を支える]可能性はない] ([私は判断する])

次に *ne* がない例を挙げる。

343-2 mir ist vil geseit daz niht gevolgen kunde dem Krimehilde man, swenner welle gâhen :

“走りだしたら最後誰も彼を追うことができないと聞いております”

ability, objective

[[だれにも[彼の後を追う]能力がない](私は)聞いている]

ne は当然 *ne* と結合の弱い動詞においてより自律的な機能を果たしえた。*durfen* はこれに相当し、*ne* はこの動詞と同じ統語論的位置にあることで *proposition* に対する *modality* 表示の機能の一部を担った。一方 *kunnen* は助動詞としての文法化の比較的初期の段階にあり、*mental/physical ability* > *root possibility*⁽¹¹⁾ などを示すのに用いられた。これらの

modality は proposition 内部に位置を占めるが、ability を示す場合には proposition そのものが複層的となる（つまり、prop 1[ある行為をおこなう] それを prop 2[(行うことが) できる]）。knnen はこの ability を中心的に示していたため、ne を prop 2 の述部に対する否定辞として前置する機会が本来的に多かった。これが ne がより遅い時点まで kunnen と高い頻度で結びつく動機であったと推測される。

2.5. まとめ

knnen, mügen の 2 つの AUX は (ge-) INF との共起の典型的な環境である。(ge-) は前接辞のなかでも特殊なふるまいをすることと、knnen との結びつきが顕著に強いことを指摘した。NEG 表現と (ge-) が用いられる環境に同じような傾向が見られ、またとくに kunnen については否定辞との形態的結合が他の AUX よりも明らかに強いことも示した。knnen (ability) と NEG あるいは epistemic modality と NEG (external) とは同じ節のレベルに表現される動機をより多く持つ。(ge-) はこのような環境により高い頻度で出現し、mügen もこれより傾向は弱いものの同様な傾向を示している。

先に述べたように、NEG 表現の動機と（とくに (ge-) の）前接の動機は ‘nonQ’ という環境においてより密接な関連性を示している。この節で述べたことを裏付けるためには、‘Q’ と ‘nonQ’ との表現としての差と、AUX（とくに modal）の意味的特性についてさらに考察する必要があるだろう。

3.1. (ge-) と結びつく INF の特性

ここでは AUX と結びつく (ge-) INF の特性を考察する。どのような傾向の不定詞に (ge-) が出現しているか、またこれまで検討したような NEG や AUX の選択のように (ge-) INF を規定するものとどのように環境が整合するのかという点から考察を進める。

3.2. INF の argument

表 5 は (ge-), NEG, kunnen, müezzen での INF の持つ統語上必須と考えられる ARGUMENT を分類したものである。NEG と kunnen はこれまで見たように (ge-) の出現する環境と重なる部分が多い。これに対して、

müezzen は (ge-) INF と共起しないのみならず NEG でも一度も現われないもので、出現しない環境の典型的なものとして挙げたみた。

表 5⁽¹²⁾

CASE	(ge-)		NEG		kunnen		müezzen	
ACC [+human]	3	10.0%	8	14.3%	4	14.3%	7	18.4%
ACC [-human]	5	16.7	10	17.9	9	32.1	15	39.5
ACC-TOTAL	8	26.7	18	32.1	13	46.4	22	57.9
GEN [+human]	2	6.7	2	3.6	1	3.6	0	0.0
GEN [-human]	2	6.7	5	8.9	3	10.7	3	7.9
GEN-TOTAL	4	13.3	7	12.5	4	14.3	3	7.9
DAT [+human]	7	23.3	10	17.9	4	14.3	3	7.9
DAT [-human]	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
DAT-TOTAL	7	23.3	10	17.9	4	14.3	3	7.9
INTRANSITIVE	11	36.7	21	35.7	7	25.0	10	26.3
TOTAL	30	100.0	56	100.0	28*	100.0	38	100.0

* 30例中2例は複合受動であったのでここでは除外した

全体として (ge-) と NEG はよく似た統語的環境を持つ INF と共起しているといえる。

kunnen が現れている例で (ge-) が現れている場合と、まったく前接辞を持たない場合とを比較したのが表 6 である。

母数が少ないので数字としては信用度は低いですが、前接辞がない場合 GEN [+human]、DAT が現われないこと、INTRANSITIVE が (ge-) においてよく現われることなどが傾向として見て取れる。

同様に NEG と (ge-) との関係を次の表 7 に示す。

kunnen の場合と同様に前接辞が現われない例において GEN [+human] が現われないこと、DAT の出現率が低いことはこの指標の特徴といえるが、INTRANSITIVE に関しては、(ge-) の存在が特別に有意とはいえ、kunnen の場合と同じような傾向は認められない。

表 6

	(ge-)		Kunnen					
			NEG		kunnen		müezzen	
ACC [+human]	3	10.0%	4	14.3%	1	9.1%	1	11.1%
ACC [-human]	5	16.7	9	32.1	3	27.3	4	44.4
ACC-TOTAL	8	26.7	13	46.4	4	36.4	5	55.6
GEN [+human]	2	6.7	1	3.6	1	9.1	0	0.0
GEN [-human]	2	6.7	3	10.7	0	0.0	2	22.2
GEN-TOTAL	4	13.3	4	14.3	1	9.1	2	22.2
DAT [+human]	7	23.3	4	14.3	3	27.3	0	0.0
DAT [-human]	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
DAT-TOTAL	7	23.3	4	14.3	3	27.3	0	0.0
INTRANSITIVE	11	36.7	7	25.0	3	27.3	1	11.1
TOTAL	30	100.0	28	100.0	11	100.0	9	100.0

表 7

	(ge-)		NEG					
			TOTAL		+(ge-)INF		no prefix	
ACC [+human]	3	10.0%	8	14.3%	1	4.5%	4	26.7%
ACC [-human]	5	16.7	10	17.9	4	18.2	0	0.0
ACC-TOTAL	8	26.7	18	32.1	5	22.7	4	26.7
GEN [+human]	2	6.7	2	3.6	2	9.1	0	0.0
GEN [-human]	2	6.7	5	8.9	0	0.0	2	13.3
GEN-TOTAL	4	13.3	7	12.5	2	9.1	2	13.3
DAT [+human]	7	23.3	10	17.9	6	27.3	2	13.3
DAT [-human]	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
DAT-TOTAL	7	23.3	10	17.9	6	27.3	2	13.3
INTRANSITIVE	11	36.7	21	35.7	9	40.9	7	46.7
TOTAL	30	100.0	56	100.0	22	100.0	15	100.0

3.3. INTRANSITIVE

ここで INTRANSITIVE としているものには必須 argument を 2 つ以上持つものが含まれる。表 8 にその概要を示す。

表 8

	(ge-)		NEG		kunnen		müezzen	
INTRANSITIVE	11	36.7%	21	35.7%	7	12.5%	10	26.3%
argument 2-	6	20.0	11	19.6	0	0.0	7	18.4
argument 1	5	16.7	10	17.9	7	12.5	3	7.9
TOTAL	30	100.0	56	100.0	28*	100.0	38	100.0

ここでも (ge-) と NEG は、kunnen あるいは müezzen に対して、より類似した分布を示している。kunnen とともに現れている動詞はすべて統語論的に argument を 1 つしか持たない。kunnen を具体性のない単なる activity に対して (のみ) 用いられていると解釈することも可能であろう⁽¹³⁾。自動詞の統語論的な argument の status は 1 種類とは限らない。kunnen において一見 S 以外の argument をとる動詞が共起していないからといってそれだけでは判断できない。S が S₀ である場合、この argument は意味論的には被動作対象である⁽¹⁴⁾。節の特性はどのようなクラスの述部を持つかによってより明確に示される。そこで INTRANSITIVE に分類した節を Van Valin (1990) の Logical Structure LS に基づいて検討した結果が表 9 である。

ここでは、ACCOMPLISHMENT および ACHIEVEMENT を示す節が少ない傾向が指摘できる。表面上 argument が 2 つ以上あっても、意味的には ACTIVITY クラスに属するものが多い。kunnen は activity とのみ共起するのではなく、むしろ ACC, ACH というクラスと共起していないというべきものであろう。

次の表 10 は kunnen かつ INTRANSITIVE の例において (ge-) の出現する環境を示したものである。上記と同様な分析がここでも可能である。さらに NEG 節で述部が INTRANSITIVE という条件で (ge-) の出現と LS との関係进行分析したのが表 11 である。

表9

		(ge-) : 30		NEG : 56		kunnan : 28		müezzen : 38	
INTRANSITIVE		11	36.7%	21	35.7%	7	25.0%	10	26.3%
Arg 2	ACC, ACH	1		2		0		1	
	STATE	3		8		0		4	
	ACT	2		1		0		1	
Arg 1	ACC, ACH	0		0		0		1	
	STATE	0		0		0		0	
	ACT	2		4		2		1	
Arg 0	ACC, ACH	0		0		0		0	
	STATE	2		2		2		1	
	ACT	1		4		3		1	
TOTAL	ACC, ACH	1	3.3	2	3.6	0	0.0	2	5.3
	STATE	5	16.7	10	17.9	2	7.1	5	13.2
	ACT	5	16.7	9	16.1	5	17.9	3	7.9

ACC=ACCOMPLISHMENT, ACH=ACHIEVEMENT, ACT=ACTIVITY

表10

				kunnan : 28					
		(ge-) : 30		TOTAL		+(ge-)		no prefix	
INTRANSITIVE		11	36.7%	7	25.0%	3	10.7%	1	3.6%
Arg 2	ACC, ACH	1		0		0		0	
	STATE	3		0		0		0	
	ACT	2		0		0		0	
Arg 1	ACC, ACH	0		0		0		0	
	STATE	0		0		0		0	
	ACT	2		2		1		1	
Arg 0	ACC, ACH	0		0		0		0	
	STATE	2		2		2		0	
	ACT	1		3		0		0	
TOTAL	ACC, ACH	1	3.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	STATE	5	16.7	2	7.1	1	3.6	0	0.0
	ACT	5	16.7	5	17.9	2	7.1	1	3.6

表11

		NEG : 56							
		(ge-) : 30		TOTAL		+(ge-)		no prefix	
INTRANSITIVE		11	36.7%	21	35.7%	9	16.1%	7	12.5%
arg 2-	ACC, ACH	1		2		1		1	
	STATE	3		8		3		5	
	ACT	2		1		1		0	
Arg 1	ACC, ACH	0		0		0		0	
	STATE	0		0		0		0	
	ACT	2		4		3		0	
arg 0	ACC, ACH	0		0		0		0	
	STATE	2		2		1		1	
	ACT	1		4		0		0	
TOTAL	ACC, ACH	1	3.3	2	3.6	1	1.8	1	1.8
	STATE	5	16.7	10	17.9	4	7.1	6	10.7
	ACT	5	16.7	9	16.1	4	7.1	0	0.0

この分析によっても ACC, ACH のクラスが出現する確率が低いことがわかる。このコーパスに出現する自動詞に関する限り、ACC, ACH/STATE, ACTIVITY という分類は、(ge-), kunnen, NEG という指標に対して有意と考えられる。

3.4. 述部の分類と macrorole との関連性

ACC, ACH と STATE, ACTIVITY との 카테고리としての相違点は以下のように捉えられるだろう。ACH は state からの派生、ACC は通常 [ACT]CAUSE [ACHIVEMENT] という構成を示す。LS における argument の位置は派生によっても変わらずに thematic relation を規定すると考えられるので⁽¹⁵⁾、派生と非派生の区別を根拠として ACC, ACH の 1 つの 카테고리としての分類が可能となる⁽¹⁶⁾。

ACC, ACH というクラスは共通して BECOME というオペレータを含む。BECOME によって [+telic] という特性をこれらのクラスに与えることができ、これに含まないクラスには [-telic] が与えられる⁽¹⁷⁾。ACC, ACH クラスは LS の構成、意味的(アスペクト的)な共通性によってグルー

プを形成している。

[+human]がACTORの macrorole を割り付けられる場合、一般に agency がより強いことが予測されることから、より ACTORNESS が高く、UNDERGOER の macrorole を割り付けられる場合には patient よりも左側、つまりより弱い UNDERGOERNESS が予想される。

(ge-) と NEG について、ACC 全体および下位区分[+human], [-human]の分布が比較的近いことを指摘した。たとえば müezzen という環境下では ACC 全体の出現率が高くこれに対して (ge-) と NEG ではこれが低いこと、さらに UNDERGOERNESS がより低い [+human]である率が高い。同じように、DAT (すべて [+human]) では出現率が (ge-) や NEG において相対的に高く、NEG と (ge-) および kunnen と (ge-) という組み合わせで最も高い数値であることが、UNDERGOERNESS の低さを物語っている。さらに一般的に自動詞に相当するものでは、(ge-) と共起する [+telic] という特性を示すクラスの述部の出現率が低い。

3.5. Transitivity

Hopper&Thompson (1980) では Transitivity (一般的概念とは異なるので語頭を大文字で示す)は以下のような項目の複合的な概念とされる (p. 252)。

	HIGH	LOW
A. PARTICIPANTS	2 or more participants	1 participants
B. KINESIS	action	non-action
C. ASPECT	telic	atelic
D. PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION	affirmative	negative
G. MODE	realis	irrealis
H. AGENCY	A high in potency	A low in potency
I. AFFECTEDNESS	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION	O highly individuated	O not-individuated

high Transitivity の特性とされているものところで議論している ACC, ACH の特性とは直接関連している⁽¹⁸⁾。同様にこのような複合的概念としての Transitivity の low の側に、これまで検討してきたような (ge-)

(あるいは前接辞全体といえるかも知れない) および NEG の特性が含まれている。さらに付け加えるならば、background と foreground における Transitivity の程度の差は⁽¹⁹⁾ 'Q' と 'nonQ' の差に現れているといえる⁽²⁰⁾。

(ge-) は Transitivity の低い環境でより多く現れる。Transitivity の低い環境とは、negative, irrealis などのより語用論に近いレベル、統語論的、意味論的な関係のレベル、不定詞の意味的な特徴などによって形成される。Transitivity は複合的概念であり、多くの点で共通して low という特徴を示す場合、他のパラメータについても同様に low であることを予想できる。(ge-) に関してもっとも注目すべきなのは、low Transitivity が non-action すなわち state という parameter を含んでいることであろう。たとえば (ge-) 付き不定詞は、動作そのものよりも状態への示唆をする傾向が強いといえる。

しかしながら、これだけでは (ge-) の機能そのものへのアプローチとしては不完全である。(ge-) はこのような環境以外でも現れているのだが、共起する AUX の機能については考察してこなかった。

3.6.1. NEG 以外で (ge-) が出現する場合

optative は本質的に irrealis という概念とかなり密接な関係にある mood で、low Transitivity の一部を構成する概念である。kunnan の場合に optative は 30 例中 12 例あり、すべて過去形である。NEG で現れているのがこのうち 4 例、さらに (ge-) と共起するのは 1 例であった。また (ge-) と optative が共起するのが 3 例ある。

NEG ではない (ge-) の出現例は 8 つあって、このうち 4 例は optative である(うち 2 例は現在)。これらは low Transitivity を示しているといえるので、残りの 4 例が問題となる⁽²¹⁾。

(ge-) は NEG and/or irrealis と一致するものではなく、NEG and/or irrealis を基準とするか、(ge-) と基準とするかで 2 つの視点を取りうる。

(1) 述部が NEG and/or irrealis で (ge-) あるいは前置を受けない

a) NEG の場合

b) opt の場合

(2) NEG and/or irrealis ではない場合に (ge-) が出現する

これ以外の場合には、low Transitivity という複合的概念の導入により、(ge-) + INF は NEG and/or irrealis の一部に対応する modifier (機能そ

のものが NEG であるというのではなく、NEG and/or irrealis ■ (ge-) INF という対応関係)であると考えることができる。NEG and/or irrealis という範疇を設定しうるのかという点も考慮されなければならないが、(1)、(2)のような周辺的な具体例の検討を通して実際の機能と low Transitivity との関連を探ることも重要である。

3.6.2. 前提 (NEG and/or irrealis が範疇を形成する) の再検討

もう一度 (ge-) と前接辞全体との相違を NEG および optative との関係に置いて考えてみる。それぞれにおいて NEG と opt とが占める割合を次の表 12 に示す。

表12

	NEG : 56	opt : 82	NEG+opt : 13	TOTAL : 494
(ge-)INF	22/56=39.3%	10/82=12.2%	6/13=46.2%	30/494=6.1%
その他の prefixed INF	19/56=33.9%	27/82=32.9%	4/13=30.8%	98/494=19.8%
non prefixed INF	15/56=26.8%	45/82=54.9%	3/13=23.1%	366/494=74.1%

a) NEG では (ge-) が全体と比較すると 6 倍以上高い率で出現する。他の前節辞付き INF の出現率は全体より 1.7 倍程度高い。

b) opt (irrealis) という基準では、(ge-) が全体との比較で約 2 倍、他の前接辞付き INF が 1.6 倍強である。

c) NEG+opt という組み合わせは、パターンとしては NEG に近く、opt であることが b) のような特徴を示すならその影響を認めることはできない。

NEG and/or irrealis で (ge-) 以外の前節辞付き INF が出現する率は共通して 1.6~1.7 倍程度高い。これに対して (ge-) では明らかな差が認められる。NEG が表現として用いられ、不定詞が前接辞を持たない場合、 $22/(22+15)=59.5\%$ の率で (ge-) が付けられる。opt の場合には $10/(10+45)=18.2\%$ で差は大きい。

NEG and/or irrealis では前節辞付き INF が用いられる可能性が通常の 1.7 倍程度高い。irrealis では (ge-) が用いられる可能性は通常の 2 倍程度

で、前節辞付き INF の場合と大差ない。NEG では (ge-) が用いられる可能性が通常の 6 倍以上となる。

3.7. まとめ

(ge-) がとくに NEG という概念と密接な関係をもつことを指摘してきた。また前節辞付き INF が、それを持たない INF と対照的に、とくに特定の AUX との結び付きにおいてより高い頻度で用いられることも指摘した。

NEG における否定辞の位置と AUX の関係は、NEG に 2 つのバリエーションを与えている。否定辞が前置される AUX は、NEG と同じレベルで modality (epistemic) が節全体に関わっている。このような場合には (ge-) を含めた前接辞付き INF が用いられる可能性が通常の 1.7 倍程度高まる。

(ge-) がこのケースで用いられる場合、動機は通常の前接辞付き INF と同じステータスを裸の INF に与えるためと推測できる。

一方、NEG が節レベルより下で行われる場合(これには、前置否定辞とは異なりミニマルな形態的保証はない)、つまり internal negation である場合には、deontic modality と同じレベルの現象となる。前節辞付き INF が用いられる可能性が epistemic modal の場合と同じと仮定すれば、(ge-) の出現率は通常の 1.7 倍程度であるが、実際には 6 倍以上の数字となっている。他の前接辞付き INF の使用率には NEG のレベルによる大きな変動は見られず、(ge-) がここで多く出現するのは、通常の前接辞付き INF と同じステータスを与えるためだけでなく、別な動機が必要となるだろう。

opt を含む述部が直接 NEG によって規定されているのは 82 例中 13 例である。そのうち 10 例に前接辞が見られ、さらにうち 6 例が (ge-) である。また opt 述部のうち前接辞が見られるのは 37 例、そのうち (ge-) が 10 例である。一方、NEG および前接辞がまったく認められないのは 42 例 (51.2%) である。mood の選択は modal verb の選択とある側面で共通性を持ち、ここに見られるような前接辞との関係は、modal verb の場合の前接辞との結合に対する語彙的な分布の偏りと同じようなものであろう。(ge-) が opt という環境で出現する限りは NEG と関連した動機の想定が可能であるが、opt が (ge-) ないし前接辞付き INF を直接動機づけている蓋然性は低い。NEG と比較して opt の (ge-) INF との共起が明らかに少ないのは、(ge-) の機能のプロトタイプとの関連性が低いためと考えられる。

NEG は (ge-) と明らかに密接に関わっている。NEG と (ge-) が共起しない場合の (ge-) の機能、使用動機の認定がとくに重要であろう。NEG という環境で (ge-) ないしなんらかの前接辞も現われない場合、および (ge-) が NEG ではない環境で出現する場合も分析が必要である。表 13 が示すように、(ge-) では 86.7%、他の前接辞では 46.9% が [irrealis] の環境で用いられている。NEG では 72.3% がなんらかの前接辞を持つ INF との結びつきを示している。(ge-) では 13.3% (4 例)、NEG では 26.8% (15 例) の場合に典型的な表現が用いられていないことになる。(NEG の 15 例中 3 例が optative、1 例が imperative である。)

表13

		(ge-)	other prefix	NEG
(ge-)		—	—	19
other prefix		—	—	22
	NEG	22	19	—
	Opt	4	27	—
SUBTOTAL A		26	46	41
TOTAL B : A/B		30 : 86.7%	98 : 46.9%	56 : 73.2%

かならずしもすべては説明可能ではないが、Transitivity という概念を導入することで、(ge-) の出現する環境の一般的特性をある程度示すことができた。MHG における不定詞に付く (ge-) は、伝統的解釈にあるように完了的を示す機能を持つ場合もあるかもしれないが、それは根本的な問題ではなく、発話を背景化するようなより抽象的な機能を想定しないと説明できないことが多い。英語発達史において見られる前接辞 ge- の機能に関する議論では機能を具体的に特定しようとして収束を見せていない⁽²²⁾。ドイツ語での ge- 全般の発達史の解釈に抽象的概念を導入して考える必要はそこにある。ge- はまさに文法化の過程を経て今日に至っているわけで、MHG の状況をさらに深く観察する必要があるだろう。より広範囲なコーパスを使った検討を今後の課題としたい。

注

- (1) たとえば Paul (1989) では次の過去分詞に ge-が付かない過去分詞を挙げられ、さらに理由が示されている (p. 188).

... funden, komen, troffen, worden, ferner braht, oft auch lâzen, zuweilen gëben, nomen, weil die meisten dieser Verba perfectiveer Art sind.

Streitberg がゴート語 ga-は Aktionsart が完了的 perfective な動詞とは共起しないと主張して以来、とくにドイツ語ではこのように考える伝統があるようである。

- (2) Streitberg 1920 (1981): 42-3. OE の ge-についての詳しい議論は丹羽 1973 参照
 (3) 機能が完了的のマーカであるかどうかは疑わしい。Szemerényi 1987 参照
 (4) ここでは AUX という表記を機能的として想定される AUX ではなく、単に動詞不定詞をマーカなしに従える動詞という意味で用いている。前者についての議論は Heine (1993: 3 ff) に詳しい。それ以外にも不定詞が単体で用いられる節にも現われることがあるが、ここでは AUX との組み合わせのみを扱う。
 (5) コーパスの選択にあたっては、同じ作品の全部あるいは一部を検討するか、できるだけ多くの作品を検討するか、の 2 つの選択があった。今回は前者を採用したのであるが、後者のアプローチによる結果は機会を改めて紹介したい。今回このコーパスを採用したのは、分量的に最適なテキストが偶然手元にあったこと、またテキストを第三者によって短縮してあったほうが都合がよかったことによるもので、他意はない。写本の系統による違いなども当然存在するわけであるが、今回はそうした点は無視せざるをえなかった。

利用したテキスト Der Nibelunge Not 桜井和市(編)第三版 1976 東京 南江堂
 引用した MHG の番号は当該書に示されている行番号である。

- (6) これは対象とした NL の特性である可能性が高い。一般には MHG においては (ge-) と mügen の結びつきがより強い。そもそも kunnen と mügen は機能的な補完性が強く、NL で見ると限り以下のような分布特性を示す。kennen は 1 人称で使われるのは現在のみ(すべて (ge-) 付き)、ほとんどが 3 人称単数過去(2 人称は単数が 1 回のみ)、『Q』で出現する率が $12/30=40.0\%$ 。mügen は 2 人称複数が 10 例あり、それがまったくない kunnen と対照的である。また『Q』で出現する率は $34/48=70.9\%$ と kunnen よりかなり高い。一方 kunnen で『Q』の場合、接続法過去の例が 6 例、これに対して mügen は 8 例で、率で比較すれば前者が『Q』において接続法過去で用いられる可能性が高い。
 (7) Palmer 1986, 220
 (8) たとえば Van Valin 1993: 8 など参照
 (9) dürfen は典型的には deontic と考えられるが、NEG で出現した 2 例とも前置の否定辞を持つ。この dürfen の 2 例を以下に示す。

32 wan wurden disiu mare ze Rîne geseit,

dun dörrftest nimer geriiten in Guntheres lant.

preterite optative

“もしこの話がラインの国へ聞こえたならば、

おまえは Gunther の国へ決して足を踏み入れられなくなろう”

この例は ‘Q’ であり、主観的か客観的かの2つの解釈を許す。“おまえは～できる”という proposition に対して状況を判断しつつ話者が主観を交えて“不可能である”と表明しているならば主観的、話者がある条件下では“おまえは～してはならない”なら客観的と解釈できる。接続法過去である AUX の選択が話者の主観を示すためになされていることは明らかなので、この *durfen* は permission や obligation ではなく epistemic possibility を示すために用いられている。前置否定辞は epistemic modal と至近の統語的位置を占めることでそのマーカとしての機能を果たしている。

319-4 do endorfte Kriemhilde nimmer leider gesîn.

preterite

“Kriemhild にとってこんなに苦痛なことはなかった”

=Kriemhild は非常に苦痛であった

この例は ‘nonQ’ であり、基本的に客観的である。表現者 (= 語り手) は “Kriemhild は (この状況) より苦痛ではありえなかった” という説明をする。これは [[[より苦痛である]可能性がある]ない] ([[[より苦痛である]ない]可能性はある]ではない) とモデル化できる。ここでは可能性が否定されている。そこで表現者による登場人物に対する感情の描写という点に着目すると、少なくとも agent oriented とは考えにくいことはわかる。上の例と同様、前置否定辞は epistemic modal に対するマーカとしての機能も果たしている。

(10) Paul 1989: 398-400

(11) Bybee, Perkins, and Pagliuca 1994: 194

(12) 用語はここでは伝統的な意味で用いているが、もう少し詳細な検討が必要があるだろう。この議論については Thompson and Hopper 2001 参照

(13) activity などのクラスの内容については Van Valin 1990 参照

(14) S_0 = the subject of intransitive verb receives the same morphosyntactic treatment as the object of a transitive verb

これに対して

S_A = the subject ... receiving treatment as the subject of a transitive verb

現代イタリア語ではこの S の差が完了助動詞選択にあたって表面化する。Van Valin 1990. さらに櫻井 1997 参照

(15) Van Valin 1990: 226 TABLE 3

(16) Van Valin 1990: 223 Achievement verbs are derived from state verbs by means of the operator BECOME; the argument structure of the predicate is unchanged.

Achievement LSs are a component of accomplishment verb LSs.

- (17) Zaenen (1988)におけるオランダ語の完了助動詞の選択要因の分析においてこの特性が挙げられている。これはイタリア語における完了助動詞の選択基準とは異なる。後者では activity クラスのみが他の 3 つのクラスと異なった助動詞を選択する。ここでの基準は, state predicate を含むか含まないかである。
- (18) Hopper and Thompson 1980 : 252ff, Van Valin 1990 : footnote 7
- (19) たとえば argument の数は background で 1 つのものが 82%、2 つのものが 18% であるのに対して、foreground では 24% : 76% とほぼ逆転している。Hopper & Thompson 1980 : 285 参照
- (20) 詳細は Thompson and Hopper 2001 での議論を参照
- (21) 該当する (ge-) の 4 例は以下のとおり
- 114-1 ich kan iuch ûf der fluot hinnen wol gefueren :
- 120-4 dâ muget ir liute sch? ner frouwen vil gesehen.
- 194-2 dô dâhte ir iewedere mit minnen an gesigen den waltlichen vrouwen :
- 286-2 ich trouwe ez heinlîche alsô angetragen, daz ...
- (22) 丹羽 1973 参照

References

- BAKKER, Egbert J. 1994 Voice, aspect and Aktionsart. In FOX, Barbara and Paul J. HOPPER (eds) : 23-47.
- BYBEE, Joan, and Paul HOPPER (eds) 2001 *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure.* Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- BYBEE, Joan, William PAGLIUCA, and Revere PERKINS 1990 On the asymmetries in the affixation of grammatical material. In CROFT, W et al (eds) : 1-42.
- BYBEE, Joan, Revere PERKINS, and William PAGLIUCA 1994 *The Evolution of Grammar.* Chicago/London : The University of Chicago Press.
- CAREY, Kathleen 1995 Subjectification and the English perfect. In STEIN, D. and S. WRIGHT (eds). *Subjectivity and subjectification.* Cambridge : Cambridge University Press. 31-54.
- CHRISTIANSEN, Hallfrid 1960 De germanske uaksentuerte prefikser. *Nordisk Tidskrift for Sprogvidenskab* 18 : 340-382.
- CROFT, William 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations.* Chicago/London : The University of Chicago Press.
- FOX, Barbara, and Paul J. HOPPER (eds) 1994 *Voice Form and Function.* Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.

- GAMON, David 1994 On the development of epistemicity in the German modal verbs *mögen* and *müssen*. *Folia Linguistica Historica XIV* : 125-176.
- HEINE, Bernd 1993 *Auxiliaries*. New York/London: Oxford University Press.
- HOPPER, Paul and Sandra THOMPSON 1980 Transitivity in grammar and Discourse. *Language 56*. 251-299
- HOPPER, Paul and Elizabeth TRAUOGOTT 1993 *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- JOSEPHSON, Folke. 1976 On the function of Gothic preverb *ga-*. *IF 81* : 152-175.
- KAHREL, Peter, and René van den BERG 1994 *Typological Studies in Negation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- KLEIN, Jared S. 1992 On the independence of Gothic syntax, I: interrogativity, complex sentence types, Tense, Mood, and Diathesis. *JIES. 20* : 339-379.
- KORTLANDT, Frederik. 1983 Proto-Indo-European verbal syntax. *JIES. 11* : 307-324.
- KRAUSE, Wolfgang 1968 *Handbuch des Gotischen* 3rd ed. C. H. Beck, Munchen.
- MOSSÉ, Fernand 1956 *Manuel de la langue Gotique 2nd édition*. Aubier, Paris.
- 丹羽義信 1973 古代英語同土接頭辞 Ge-の研究. 東京 松柏社
- PALMER, F. R. (ed) 1995 *Grammar and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- PAUL, Hermann 1989 *Mittelhochdeutsche Grammatik 23 Aufl.* Tübingen, Max Niemeyer.
- 櫻井健 1996「ゲルマン語における動詞時制カテゴリーの再編について」『言語情報科学研究』1: 29-58.
- 1997「イタリア諸方言における完了助動詞の分布と文法化の関連性について」『ロマンス語研究』30: 42-51.
- SCHERER, Philip 1954 Aspect in Gothic. *Language 30* : 211-223.
- SZEMERÉNYI, Oswald 1987 The Origin of Aspect in the Indo-European Languages. In *Glotta LXV*. 1-18.
- STEIN, Dieter and Susan WRIGHT (eds) 1995 *Subjectivity and Subjectivisation*. Cambridge: Cambridge University Press
- STREITBERG, Wilhelm. 1981 (1920) *Gotische Syntax*. Carl Winter, Heidelberg.
- TAYLOR, John R. 1995 *Linguistic Categorization 2nd ed.* Oxford: Clarendon Press.
- THOMPSON, Sandra and Paul J. HOPEER 2001 Transitivity, Clause Structure, and Argument Structure: Evidence from Conversation. In BYBEE, Joan and Paul HOPPER (eds.) 27-60.
- TRAUGOTT, Elizabeth C. 1995 Subjectification in grammaticalisation. In STEIN,

Dieter and Susan WRIGHT (eds.). 31-54.

VAN VALIN, Robert J., Jr. 1990 Semantic parameters of split intransitivity.
Language 66 : 221-260.

ZAENEN, Annie 1988 Unaccusatives in Dutch and the syntax-semantics interface.
CSLI 123, Stanford University